



紅葉狩りの帰り、夕焼けが空一面に広がっていた。思わず遠く離れた故郷と幼なじみに思いを馳（は）せてしまった。

「真っ赤な太陽」という歌があるが、太陽はもちろん無色の白色である。真昼に太陽を仰ぐとまぶしくて真っ赤どころではない。しかし、日が西に傾くにつれて太陽光線は大気層を斜めに差すので、経路が長くなる。すると大気の下層付近には目に見えない微細なちりがいっぱい漂っているため、上空で散乱された太陽光中の



15.11.1

「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 夕焼け

短い波長の青色が、途中でほとんど反射・吸収されてしまうので、残った長い波長の赤系統の色が届く。ちょうど湖畔の葦（あし）が、沖からやって来るさざなみ波を減衰させ、大きな波が岸边に寄せるように。こうして真っ赤な太陽は、まるで照明灯のように雲たちを赤々と照らし輝かせる。

この夕焼け、人類の誕生以来、空の絵巻として人々を慰めてきたに違いない。しかし夕焼けの空は短く、はかない。夕焼けの正反対が朝焼けである。その仕組みは夕焼けとまったく同じだが、夕焼けにはなぜか郷愁と同時に、明日への希望を感じさせる。実際、西の空が真っ赤な夕焼けに染まる翌日は晴れることが多い。

今日から11月、すでに木枯らし1号が吹いた。間もなく霜の便り。そして秋は行く。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



水戸芸術館の近くに水戸地方気象台がある。先の東日本大震災の被害を受けて建て替えられ、全国の気象台の中でもモダンな建物である。構内の「露場」と呼ばれる芝地に雨量計や「アメダス」などが配置されており、中央の白い塔には風向・風速計、日射計（日照時間を測る）が設置されている＝写真。「ウインドプロファイラー」と呼ばれる上空の風を観測するシステムもある。

気象庁の天気予報サービスは、「全国予報中枢」「地方予報中枢」「府県予報中枢」の3階



15.10.18

「気象コンパス」主宰

古川 武彦

### 水戸地方気象台

層になっており、水戸地方気象台は「府県予報中枢」で、地方中枢の指揮を受け、県内の予報や警報について全責任を負っている。約30人の職員が交代勤務で24時間体制を敷いている。去る9月10日の常総市を中心とした「特別警報」なども水戸地方気象台が行った。

天気予報の対象地域は「北部」と「南部」の2地域で「1次細分区域」と呼ばれる。テレビなどで「ピンポイント予報」が見られるが、これに相当する気象台の公式予報は「北部」「南部」の代表としての水戸と土浦の2地域のみである。

NHKなどで放映される多数の地点の3時間刻みの予報は、ほとんどが「全国予報中枢」が作成した面的な「分布予報」を基に、各局が編集したものである。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)